



# 筑紫女学園大学リポジト

山崎朝雲作 銅像「明治天皇御尊像」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田鍋, 隆男, KIMOTO, Takuya メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1085">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1085</a>

山崎朝雲作 銅像「明治天皇御尊像」

田 鍋 隆 男

筑紫女学園大学  
人間文化研究所年報

第三十二号 二〇二二年

## 山崎朝雲作 銅像「明治天皇御尊像」

田 鍋 隆 男

### はつめい

筑紫女学園大学人間文化研究所では、平成十八年（二〇〇六）より浄土真宗文化財調査プロジェクト（現・北部九州真宗文化史研究会）をスタートさせ、浄土真宗寺院が所有している絵画、書、彫刻、工芸、古文書、古書籍などの文化財調査を実施してきた。しかしその寺院調査も昨年から新型コロナウイルス禍により困難となり、代わって学内に在る文化財調査をすることになった。前回は筑紫女学園の創始者水月哲英翁の遺墨や絵画などの関係遺品が木本拓哉氏によって紹介されたが、今回は同大学中央図書館に保管されている、福岡出身の近代彫刻家山崎朝雲が大正十年（一九二一）に制作した銅像「明治天皇御尊像」一躯について考察することにした。なおこの像は昭和五十七年（一九八二）五月に三方達一教授より寄贈されたものである。

### 明治天皇御尊像

この銅像は桐製箱に収納されており、その蓋の表には「明治天皇御

尊像」と書かれ、蓋裏には「大正十辛酉年七月三十日謹作 山崎朝雲④」（④は朱文長方印「朝雲」）の墨書がある。これにより作品名、制作年、作者がわかるのであるが、これらの墨書は私の眼識では朝雲の自筆に間違いないと思われる。

法量は像高四五・六cm、台座を含めた高さは四九・〇cm、さらに立④（りゆうえい）を含めた総高は五九・六cmあり、最大幅（小袖）二・三・五cm、台座の幅一六・三cm、奥行き一六・五cm、高さ二・八cmである。なお立④は長さ一四・三cm、柄を含めた総長一五・〇cmで、この立④は後補であるということが最近判明した。桐製箱のなかには蓋表に「立④」の墨書、同裏には朝雲の花押と印（朱分長方印「朝雲」）が付いた桐製小箱が添付されており、その小箱のなかに柄が欠損した当初の④一本が入っている（註1）。

像の形態を見るに、頭頂には天にまっすぐ伸びた天皇を象徴する立④（らん）という威厳の表現の具とされる一幅の横布が付いているのが特徴の縫腋（ほうえき）という袍衣を着し、その下には下襲（したがさね）を着し、その背面には身分が高いほど長いという長く延びた後

ろ見頃（みごろ）の裾（きよ）を足元に束ねている。同じく背面の腰部には石帯（せきたい）という腰帯を締め、その締め余りを背面に回して丸く曲げて上方から帯の内側にさしているのが見られる。太刀は佩いていない。右手に笏（しゃく）を執り、左手は大袖の内に入れ両手とも同じ高さに腹部の横前方に添え、両足には浅履（あさぐつ）を履いて真正面を向いて直立する。

技法は込型（こめがた）鑄造で制作されている。石膏原型（福岡市美術館蔵）に紙スサを混ぜた粒子の細かい土を直接あて、それが乾いたのちに細分化して石膏原型から取り外し、細分化した各部をふたたび寄せて鑄抜きやすい一つのかたまりつまり雌型（めがた）とする。この雌型の凹部に約二ミリメートルの厚さに粘土を均等に貼り付け、その上に雄型（おがた、中型・なかご）となる細かい土をつめる。土と型の間には剥がれやすいように液がぬられる。雄型を取り出して雌型との間の約二ミリメートル厚さの粘土を取り除き、要所数ヶ所に中の型を支える金属製の筭（こうがい）をつけ、雄型と雌型の間に空間を保つ。そしてその空間に液状に溶かした青銅を流し込んで像をつくる。ただし、立纓と冠の簪、右手にもつ笏は別鑄にして嵌め込んでおり、像の表面には経年変化予防のため漆が塗布されている。さらによく見ると、背後に束ねられた裾の最前列の左端と台座の奥まったところに極小さな隙切（すぎぎれ）という穴がある。幅二ミリメートル近くの空間の最深部にまで湯まわりが届かなかったと思われる。像の総重量は六〇五六グラムである。込型鑄造法は青銅などの使用する材料が少なくすみ、したがって軽量なので輸送しやすく、しかも冷えて固

まりやすく鑄肌が美しいという特徴がある。そのためわが国では明治中期ころから盛んに用いられている方法で、ちょうど朝雲が活躍する時期と重なっており、木彫家ではあるがその制作過程で石膏原型をつくることから数々の鑄造作品もつくっている（註2）。

肖像彫刻は当然のことながら本人に顔が似ていることが重要である。東京上野公園にある西郷隆盛銅像（明治三十一年・一八九八）の木造原型は東京美術学校教授の高村光雲が制作しているが、西郷隆盛の写真が残っていないだったので弟従道（つぐみち）の顔を参考にして制作したといわれ、充分とはいかず大同小異で銅像ができたという（註3）。福岡市西公園にあった平野国臣銅像（大正四年・一九一五、戦時金属供出で消失）の場合は、木造原型は東京美術学校で光雲に学んだ、国臣の甥で福岡市出身の彫刻家田中雪窓が担当しているが、同様に国臣の写真がないので国臣を知っている人や当時生存していた兄弟、さらに旅宿したことのある京都繩手町の旅籠女主人にも取材し八年間研究したという（註4）。

それでは当時神格化されて実見することがたいへん難しく、さらに写真撮影を好まないことで知られる明治天皇の像はどのようにして制作されたのだろうか。「明治天皇御尊像」の顔貌を見て先ず思うことは、きりりとした眉、への字に結んだ唇、その上下にある形の整った髯と顎鬚、そして細面にまっすぐたてに通った鼻筋、眼は切れ長で彫の深い顔面、それはまるで西洋人のそれである。大分県出身の彫刻家渡辺長男が制作した銅像「明治天皇御尊像」（大正三年・一九一四）は、左手に軍刀の柄を持ち右手に羽飾りがついた軍帽を持った軍服正装の

立像であるが、これまたいささか顔貌は西洋人的であり、この銅像制作にあたっては宮内省から御写真が貸し出されたことが知られている（註5）。つまり龍顔を再現して像をつくることができなかつたので、渡辺長男はイタリア人画家エドアルド・キヨツソーネがコンテで原画を描き、それを日本人写真家丸木利陽が撮影した「御写真」を基に制作したのである。

凹版技術にすぐれた版画家キヨツソーネは明治八年（一八七五）に日本政府に招聘されて大蔵省紙幣寮に着任している。明治十一年に発行された日本で最初に肖像が使われた紙幣である十円札にはキヨツソーネが描いた神功皇后像が採用されている。その顔は当然想像で描いたものだが、それは若い西洋の女性の顔をした神功皇后であつた。明治天皇の肖像写真は独立国家として象徴的なものであり、外国皇族と写真を交換するさいに儀礼上不可欠のものであつた。しかし明治天皇は宮内大臣伊藤博文の新しく写真撮影することの勧めに応じなかつた。そこで案出されたのがキヨツソーネに物影から天皇の顔や姿をスケッチさせ側近の者の意見を聞いて肖像画を完成させ、それを写真師に撮影させて「御写真」とすることであつた。明治二十一年にできたその「御写真」は前述したような西洋人をおもわせる龍顔であつた。「御写真」いわゆる「御真影」は政治的な意図でもって教育勸語とともに取扱儀礼を伴って全国に流布し、多くの国民はこの顔以外の天皇の顔を知らないのである（註6）。

慶応三年に生れ明治時代とともに生きて来た朝雲もまた、当時の多くの国民同様に天皇を頂点にした国家体制のなかで日常を営んできて

おり、明治天皇といえは「御真影」の天皇像であつたと思われ、写実的な作品を心掛ける朝雲にとって、参考にする明治天皇の龍顔は「御真影」しかなかつたと思われる。そして形態は一〇年ほど前に制作した福岡市東公園にある元寇記念碑亀山上皇像（明治三十七年・一九〇四）と同様に御装束姿とするのが、御装束をよく研究していたので制作しやすかつたと思像するに難くない。亀山上皇像の木造原型（福岡市東区宮崎宮蔵）を制作するときは京都南禅寺天寿庵に安置されている法体の亀山上皇木像を基本にして、服装は鎌倉鶴岡八幡宮が所蔵している御衣を、そして剣や笏、杵は熊野新宮の宝仗に基づき、さらに有職故実家の関貞之助より装束の時代考証などの助言を求め、関自身に衣冠束帯を着せてモデルとしたという（註7）。大正十一年には「有栖川宮威仁親王殿下御束帯立像」「同妃殿下御装束立像」という宮様の装束姿の木彫立像を制作するなど御装束姿像に慣れ親しんで来ており、像高四五・六cmの像に多くの勳章の胸飾りや肩章など複雑な裝飾をつけた軍服姿より、日本古来の装束のほうが制作しやすかつたと思われる。

大正十三年（一九二四）の第五回帝展に出品した木彫「頭山翁」を制作するとき、玄洋社社長頭山満の正面、側面、背面、さらに顔面アップの正面、側面、背面などの多くの写真が撮られている。それほど朝雲は現存人物の肖像彫刻を制作するときは様々な角度から撮つた写真を多用して写実性を高めているのだが、「明治天皇御尊像」は「御写真」と亀山上皇像の制作経験からだけで制作されたと思われる。多くの国民が畏敬の念を以て頭に描く「御真影」の明治天皇像を、油土を

使用した西洋的写真彫刻の技法を取得した朝雲が制作した傑出した作品である。ただし、明治五年（一八七二）に長崎出身の写真師内田九一（くいち）が撮影した、立纏の冠を被り両手で膝の上の笏を持って椅子に腰かけている明治天皇御装束姿の「御写真」を朝雲が見たかどうかは不明である。

## 山崎朝雲

山崎朝雲は慶応三年（一八六七）二月十七日生まれである。その前月の一月に明治天皇が即位して翌年九月八日に明治と改元されているので、したがって明治の年数がそのまま朝雲の満年齢となる。生まれたところは博多祇園山笠で有名な榊田神社正面の前の道をへだてた東側にある榊田前町三十六番地の二（現・福岡市博多区冷泉町八組）で、博多人形師、家具職人、細工物師などが多く住む職人の町に父利右衛門重徳（別名五三郎）と母トヨの間に八人兄弟の六男として誕生した。幼名は春吉（はるきち）という。利右衛門重徳は文政六年（一八二三）生まれで、山崎家の養子となっている。トヨは文政十年（一八二七）生まれである（註8）。

地元の小学校を卒業すると十七歳の頃まで博多の仏師高田又四郎良慶に師事し彫技を学んでいる。又四郎は江戸期に博多で活躍した仏師佐田文蔵慶尚として京都の仏師吉村愛之助宗蓮に師事し、数多くの仏像などを造っている。とりわけ明治四十三年の九州沖繩八県聯合共進会にも出陳された銅像「博多大仏」（総高約一一・五メートル、称名

寺蔵、戦時金属供出で消失）の原型を精案制作したことで知られる、明治大正期の福岡を代表する仏師である。ここで彫技や木寄せ法さらに彩色法など仏像制作に必要な技法を修めて又四郎より独立した。

父利右衛門はすでに他界しており母トヨとともに、兜をかぶった五月人形や仏像を制作しながら生計をたてることになる。二十一歳で近所の下赤間町（現・福岡市博多区冷泉町）に住む一丸（橘）エイと結婚する（註9）。春吉が習得した彫技の優秀さは明治二十一年（一八八七）に制作した「奥田弁次郎像」（大阪歴史博物館蔵）に見ることができる。像高二七・〇cmの小さな坐像であるが、仏像なみの木寄せ法に胡粉下地彩色といった本格的な作り方で仕上げられている。春吉の名が関西まで聞こえていたのである（註10）。このほか「母の像」（明治二十一年）や「深見孫三郎像」（明治二十三年、福岡市美術館蔵）も同様にいずれも小さな坐像ながら本格的造りの肖像彫刻である。

明治二十三年四月に東京の上野公園にて開催された第三回内国勧業博覧会に、高価な黒柿材を使った木彫「獅子を擁く巖に倚りて眠れる羅漢の覚めかけた時、其巖が夢とも現ともなく獅子に見ゆるの図」を出品。彫刻作品が置物としてあるいは工芸品と見られていたこの頃に、美術品として衆人の注目を集めたと新聞は報じている（註11）。二年後に制作した木彫「龍虎相搏」が、たまたま来福していた農商務省で殖産興業政策を推進していた前田正名の眼にとまり、勧められて翌年に上洛し京都市新門前梅本の池田商店に就職した（註12）。そこで知己を得た東京美術学校出身で光雲の教え子の京都市美術工芸学校

彫刻科教諭大村西崖から高村光雲の活躍の話をよく聞いていた（註13）。

明治二十八年（一八九五）四月に京都岡崎にて開催された第四回国勸業博覧会に出品した木彫「養老孝子」が、妙技銅賞を受賞し美術的彫刻物として美術館に陳列された。さらに五月半ばの天皇行幸の際には天覧とともに宮内省に二〇〇円で御買上になるという荣誉に浴した。博覧会も閉会に近づいた頃に大村西崖が、上洛していた光雲に春吉を弟子に採用するよう依頼した。しかし多くの弟子をかかえていた光雲は審査員として「養老孝子」の出来を見ていたから、道具の鈍さによる素人離れしない作風ではあるがもはや弟子入りをする必要もないかと思つてやさしく断り、後日再度、西崖が春吉をつれてきて懇請しても同様の答えをした（註14）。

十月に帰福して東公園の某家にて持病の脚氣の療養のかたわら、秋季美術展覧会への出品作品を彫刻していた春吉は、京都で光雲が言った聞きたいことがあれば教えますから軽い気持ちで上京の節は訪ねて来てもかまわないという言葉を頼りに、外国への輸出を想定した華美な美術品を制作販売する池田商店に見切りをつけ、更なる高所を目指し東京で修行する決心をした。ちょうどこの頃福岡出身の農商務省次官金子堅太郎から、東京赤坂福吉町の旧福岡藩主黒田家本邸の改築にあたって装飾的な彫刻物を制作するようにと声をかけられ、さらに春吉を応援していた博多の酒造家加野熊次郎や加野宗三郎等の後押しもあつて上京することにした（註15）。

明治二十九年（一八九六）一月八日に上京、四十四歳の高村光雲の

門に入ることになった。東京美術学校に行つて西郷隆盛銅像の原型を製作中の光雲に面会したとき、ちょうど同校教授竹内久一は福岡市東公園に建てる日蓮上人銅像の原型を制作していたところであつたという（註16）。代々仏師であつた高村家の養子に入った光雲は、廃仏毀釈によつて大打撃を受けた仏師が新時代に木彫界で生き残るために、伝統的な技法で儀軌に則つて造形する従来の木彫の「仏臭」を無くして、西洋的技法による写実的作品を自由に作ることに活路をさぐつていた（註17）。朝雲は竹内久一、米原雲海らとともに写実的な洋風彫刻の技法を大理石彫刻家小倉惣次郎に学んだ。付けたり取り除いたり自由自在に成型できる油土を使用して写実的な原型をつくり、それを変形させないために石膏に型取りし、その石膏原型から星取技法によつて木材に写し彫刻するのである。この技法はイタリアでは大理石に彫刻するときを使う技法で、明治九年に工部美術学校の御雇い外国人教師として来日したイタリアの彫刻家ヴィンチェンツォ・ラギーザが伝授した技法で、彼に師事した小倉惣次郎から学んだ朝雲らは大理石でなく木材に応用したのである。この方法はひとつの石膏原型から複数の同じ木彫作品を制作することができるので、同一作品に対する複数の需要に応じることが出来るようになり木彫界の発展に貢献した（註18）。

明治三十一年にあとう会という勉強会を海野義盛、新海竹太郎、米原雲海、沼田一雅らと結成し、翌年には三三会と改称し研鑽を怠ることとはなかつた。明治三十二年には東京彫工会の第五部（木彫）委員、さらに審査員に依頼され、翌年には光雲の推薦で日本美術協会の会

員、同会第二部(彫刻、金工)委員、そして審査員となり、朝雲は着々とわが国彫刻界の中心の階段を昇っていた。そして明治三十四年、湯地文雄らの元寇記念碑建設事務所から依頼があった元寇記念碑亀山上皇銅像原型の制作のため、東京駒込千駄木林町のアトリエに工場を新設し彫刻に着手した(註19)。明治三十五年に高さ約五メートルの木造原型を完成させ、途中京都でお披露目するなどして佐賀市へ運び、谷口鉄工所で鑄造されて、明治三十七年十二月二十五日に福岡市東公園にて元寇記念碑亀山上皇銅像の除幕式が挙行された(註20)。

明治四十年(一九〇七)には岡倉天心を会長に米原雲海、平櫛田中、加藤景雲、山本瑞雲らとともに日本彫刻会を結成し、事務局を朝雲のアトリエに設けて木彫界のさらなる発展に尽力した。明治四十一年の文部省第二回美術展覧会に木彫「大葉子(おおばこ)」(東京国立近代美術館蔵)を出品し、三等賞を受賞して政府に買い上げられ、明治四十四年の文部省第五回美術展覧会には木彫「籠(たかおがみ)」(同)を出品しこれまた政府に買い上げられ、朝雲の最も充実した時期のこの二点は今日では朝雲の代表作として広く知られている。

明治、大正、昭和と三代にわたって日本美術協会、東京彫工会、日本彫刻会、各種の博覧会などの展覧会や文展、帝展、日展の官展系の重鎮として活躍し、さらに筑前美術協会や福岡県美術協会など郷土の美術発展にも貢献し、昭和九年には帝室技芸員、さらに帝国美術院会員(のち帝国芸術院会員、日本芸術院会員)となり、昭和二十七年(一九五二)には八十五歳にして文化功労者となった。そして昭和二十九年(一九五四)六月四日に老衰のため東京にて逝去した。茶の湯を好

んだが酒もたばこも嗜好せず彫刻一筋の八十七年間であった。

## あとがき

明治天皇が崩御すると国民の間から聖徳を偲び遺徳を景仰する気運がたかまり、大正三年に崩御した昭憲皇太后を合祀した明治神宮の建設が同四年に着工し同九年十一月に鎮座祭がおこなわれた(註21)。

大正二年には東京と大阪にて明治記念博覧会が開催され、明治天皇治世中の重大な出来事二十一場面を東京の人形師安本亀八が等身大の人形でもってパノラマ風に制作したのをはじめ、宮内省御物、恩賜品、明治天皇に殉じた故乃木希典大将の遺品、明治時代を築いた勤王志士遺品などが陳列された(註22)。また佐賀県出身の洋画家高木背水は大正二年に明治天皇の肖像を描き始め翌年に完成している(註23)。日本画では金子堅太郎が奉賛会会長をつとめた明治神宮境内の聖徳記念絵画館が大正八年に起工し、明治天皇一代の事歴を画にしてその聖徳を後世に残そうとした(註24)。大正十三年には渡辺長男の弟の彫刻家朝倉文夫も衣冠束帯姿の「明治天皇御尊像」を制作している(註25)。

このように崩御後は明治天皇の治世や遺徳を偲ぶ博覧会等が開催され、銅像が建設され肖像画が描かれた。それは明治政府による天皇を頂点にした近代国家建設がすすめられ、帝国憲法、教育勅語、そして「御真影」によってすべての国民の心のなかに「明治天皇」が焼き付けられた成果なのかもしれない。そして朝雲もまた大正二年(一九一



三) 六月に「明治天皇御東帯銅像」を制作している。多くの作品が宮内省や東宮職などから数回にわたり御買上の荣誉に浴し、それによって彫刻家としての名声を高めることができた(註26)。その報恩と、追悼のために「明治天皇御東帯銅像」が制作されたといわれ、この年の三月一日に本名を「春吉」から「朝雲」に改名し、新時代の大正へと踏み出している。この「明治天皇御尊像」はその同じ石膏原型から铸造されている。

この稿作成にあたっては、鑄金家遠藤喜代志氏のご教示、そして福岡市美術館学芸課宮田太樹氏、福岡市博物館市史編さん室のご協力を得ました。記して厚くお礼申し上げます。

## 註

(1) 福岡市美術館開館三周年記念展「福岡が生んだ近代彫刻の巨匠―山崎朝雲展」(一九八二年十一月三日〜二十八日)へ出品するために、筑紫女学園大学非常勤講師(当時)の彫刻家故小田部泰久氏から依頼されて、鑄金家遠藤喜代志氏が柄が欠損していた元の立纒に似せて新たに立纒を制作したとのこと(遠藤喜代志氏よりご教示、二〇二二年)。

(2) 山崎朝雲は木彫家ではあるが以下の鑄造作品が知られている。「少女之図」(一九〇〇年)、「野球技之図」(同年)、「搾乳(置物搾乳牛図)」(一九〇三年)、「文殊」(一九〇四年)、「小兒戯(太鼓と小兒置物)」(同年)、「元寇紀念碑亀山上皇像」(福岡市東公園、同年)、「上代風俗柄香炉ヲ捧

グ官女」(一九〇五年)、「新装」(同年)、「葛城山の狩」(一九〇六年)、「彫刻家とモデル」(同年)、「夫のかたみ」(一九〇八年)、「弓術置物」(同年)、「砂文字(砂上の文字)」(同年)、「津輕藩祖為信公甲冑型」(青森県弘前市弘前公園、同年)、「医学博士大森治豊」(福岡市九州帝大医学部構内、一九一〇年)、「達磨」(同年)、「達磨置物」(一九一一年)、「高木兼寛男爵像」(東京自邸、一九二二年)、「明治天皇御東帯銅像」(一九一三年)、「亥」(一九一八年)、「鎌倉時代波木井公像」(山梨県身延山久遠寺、一九二二年)、「清水先生」(一九二二年)、「鑄銀」加茂競馬」(一九二四年)、「狛犬」(兵庫県神戸市湊川神社、一九三六年)、「狛犬」(一九三八年)、「釈迦誕生仏」(一九四三年)。

(3) 『福岡日日新聞』一九〇八年(明治四十一年)八月十五日三頁。なお西郷隆盛銅像は風貌が少しも似ていないとか服装が気に入らないとかで、建立されて間もなく改鑄計画がでている(『福岡日日新聞』一九一三年(大正二年)九月二十四日四頁)。キヨッソーネは「西郷隆盛像」を描くとき、近親者からの証言をもとに顔の上半分は実弟の西郷従道から、下半分は従弟の大山巖からとって合成して描いたという(多木浩二『天皇の肖像』岩波現代文庫学術七六、岩波書店、二〇〇二年)。

(4) 田中雪窓『平野國臣先生之像』一九〇四年(福岡市博物館蔵、甲冑師田中源工資料)。

(5) 一九一二年(明治四十五年)七月三十日午前零時四十三分(宮内省公表)に明治天皇が六十一歳で崩御したその夜、元老および徳大寺実則侍従長、侍従、宮内高官各女官等が参席していた席上で、元宮内大臣で日本美術協会副会頭田中光頭が銅像謹製の議を申出た。この議はすぐさ

- ま皆の同意を得、後日、田中は原型を大分出身の彫刻家渡辺長男に、鑄造を東京美術学校教授岡崎雪聲に依頼することにした。渡辺長男は原型制作にあたって、天皇十六歳のときの装束姿と二十歳のときの大元帥軍服姿の「御写真」を基にし、大元帥の軍服、佩剣、帽子、勲章等は実物を拝見し、龍顔は側に仕えていた典侍や権典侍に聞き、さらに昭憲皇太后が所持していた「御写真」五枚を拝借して細部を確認し、約一年を費やして銅像を完成させた。しかし昭憲皇太后の崩御(大正三年四月九日)があつて銅像は岡崎雪聲方に保管されたままであつたが、一九一五年(大正四年)に銅像写真が田中光顕に差出され、それを見た元老山縣有朋がよく似ていると絶賛した。これにより明治神宮が竣工した後には社殿に奉安する裁可が降り、銅像は明治神宮竣工まで吹上御苑内の宝庫に安置されることとなった(『福岡日日新聞』一九一六年(大正五年)六月十五日四頁)。「偉人の倂」に掲載された「明治天皇御尊像」の説明には「御写真宮内省御貸下／「原型作者」渡辺長男謹作」とある(総監修北澤憲昭、監修田中修二『銅像写真集 偉人の倂 「凶像篇」ゆまに書房 二〇〇九年)。
- (6) 多木浩二『天皇の肖像』。古田亮「描かれた明治天皇」『日本美術全集 第一六巻 幕末から明治時代前期 激動期の美術』小学館 二〇一三年。明治二十三年の第三回国勸業博覧会に出品された竹内久「作」神武天皇像も、作者によると顔は明治天皇の「御写真」を模したと言っている(塩谷純「歴史を学ぶ・楽しむ」幕末明治期の視覚表現から」『日本美術全集 第一六巻 幕末から明治時代前期 激動期の美術』小学館 二〇一三年)。
- (7) 『福岡日日新聞』一九〇三年(明治三十六年)二月六日四頁。「龜山上皇尊像の木型」『美術新報』二巻九号 画報社 一九〇三年。「龜山上皇の御肖像銅鑄原型」『京都美術協会雑誌』一三五号 一九〇三年。「三十一、二歳の若い頃感激して謹製した」『福岡日日新聞』一九三八年(昭和十三年)五月三十日。
- (8) 山崎家は代々陶工であつたといわれ、その祖先は慶長五年(一六〇〇)に福岡へ移封された黒田長政に同行して来た瓦師山崎権右衛門であるという(『昭和美術百家選 第二十三編「山崎朝雲」』三頁 美術日報社 一九三九年)。
- (9) エイの兄は筑前琵琶橋流の創始者橋智定(旭翁)で、明治三十一年に東京にて明治天皇、皇后両陛下の御前にて弹奏している(『福岡日日新聞』一九八八年(明治三十一年)九月三日五頁)。
- (10) 像底陰刻銘「天保八年六月廿六日出生／奥田辨治郎像／明治廿一年十二月上旬作之／福岡縣博多住佛師／刻人 山崎春吉」(なにわ歴博カレンダー) N.0.三五 大阪歴史博物館 二〇一〇年)。
- (11) 『福岡日日新聞』一八八九年(明治二十二年)十二月七日二頁。
- (12) 『福岡日日新聞』一八九三年(明治二十六年)四月十三日二頁。
- (13) 山崎朝雲「明治中期の彫刻界」『日本彫塑』二号 日本彫塑発行所 一九四一年。
- (14) 高村光雲『光雲懷古談』萬里閣書房 一九二九年。
- (15) 『福陵新報』一八九五年(明治二十八年)十月一日三頁。
- (16) 「明治中期の彫刻界」。「美術談片(下) 山崎朝雲氏談」『福岡日日新聞』一九〇九年(明治四十二年)七月一日三頁。

(17) 高村光雲『光雲懷古談』。

(18) 福岡の近世絵師齋藤秋圃が描き仙厓が賛をした「仙厓和尚図」(福岡市美術館蔵・博多百年蔵コレクション)をもとに、朝雲が大正七年に制作した「仙厓和尚像」(幻住庵蔵)は、大正十一年の第四回帝展出品の「繩床の仙厓」、昭和十年に博多米穀株式取引所仲買人荒津長七の依頼で制作した「仙厓和尚像」、同年に仙厓百年遠忌のために九州大学医学部教授中山森彦から依頼され昭和十四年の第三回文展出品の「庵の小春日」および翌年の第一回福岡県美術協会展出品の改題した「仙厓和尚像」(九州大学蔵)、そして出光美術館蔵「仙厓和尚像」が知られる(『福岡日日新聞』一九一八年(大正七年)四月十九日七頁、荒津長七より朝雲宛書簡『福岡市美術館叢書Ⅰ 山崎朝雲資料集』福岡市美術館協会 一九八七年、中山森彦より朝雲宛書簡『同』、宮田太樹「第三〇五回水曜講演会 福岡の二大コレクション」『出光美術館 館報』第一八〇号 二〇一七年)。

(19) 『福岡日日新聞』一九〇一年(明治三十四年)三月十二日四頁。

(20) 『福岡日日新聞』一九〇四年(明治三十七年)十二月二十七日四頁。

(21) 三橋健「明治神宮」『国史大辞典』第十三巻 吉川弘文館 一九九二年。

(22) この博覧会は福岡市においても大札祝典記念博覧会という名称で、大正三年四月一日から五月三十日まで元共進会跡付近渡辺通り法印田(現在の中央区天神一丁目付近)の空地で開催され、その模型人形館には東京の人形師大柴徳太郎によって明治天皇一代の遺蹟を表す場面がつけられていた(『福岡日日新聞』一九一四年(大正三年)一月二十一日九頁、二月二十七日九頁、三月二十六日九頁)。

(23) 「高木背水」『日本美術年鑑』昭和十九・二十・二十一年版 八五〇八六頁 東京文化財研究所。

(24) 壁画作成の依頼画家のことで横山大観、川合玉堂、小堀鞆音、下村観山といった帝展院展の巨頭の手を煩わせた(『福岡日日新聞』一九二三年(大正十二年)二月二十二日七頁)。

(25) 新聞に掲載された写真を見るに、像は立纏の冠を被り右手に笏を持った装束姿の立像で朝雲作「明治天皇御尊像」に似ている。不鮮明な写真ではあるが顔貌は細面で鬚のある西洋人風で、これまた「御真影」をもとに制作されたと思われる(『福岡日日新聞』一九二四年(大正十三年)三月十日三頁)。

(26) 宮内省御買上作品は「養老孝子」(明治二十八年買上)、「元禄風俗遊花之図」(明治三十年買上)、鑄銅「母子置物」(明治三十五年買上)、「海岸の小児」(明治三十六年買上)、「伊企雛」(明治三十八年買上)、「上代風俗柄香炉ヲ捧グ官女」(同)、「竹馬遊」(明治三十九年買上)、鑄銅「彫刻家とモデル」(同)、「桂の影」(明治四十年買上)、鑄銅「弓術置物」(明治四十一年買上)、鑄銅「砂文字」(同)、「狗兒」(明治四十三年買上)、「張果」(明治四十四年買上)、「林和靖」(同)。東宮職御買上作品は「鉄拐仙人」(明治三十年買上)、「拾得子」(明治四十二年買上)。皇宮職御買上作品は「掃除」(明治三十一年買上)である。



明治天皇御尊像 1921年 山崎朝雲作



明治天皇御尊像（斜正面）



同（左側面）



同（右側面）



同（背面）



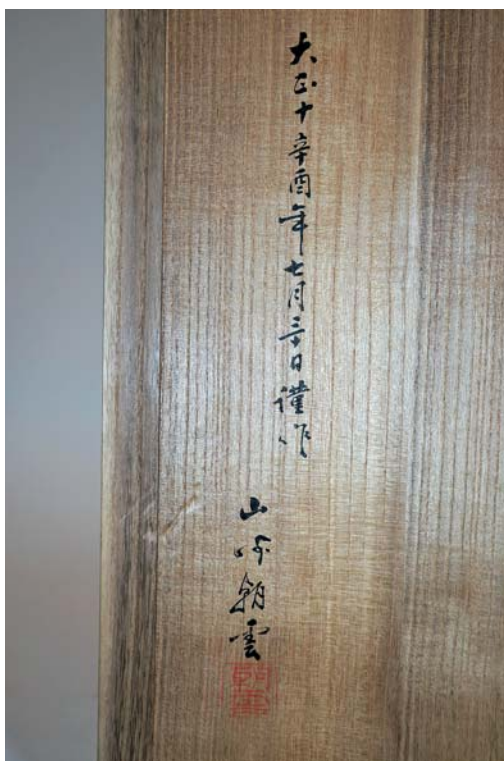
同（頭部斜正面）



同（像底）



桐製箱



蓋裏墨書



明治天皇御尊像石膏原型（福岡市美術館蔵）



明治天皇御尊像 1914年 渡辺長男作  
（『銅像写真集 偉人の俤』より）



山崎朝雲 1937年頃（『山崎朝雲資料集』より）